

名古屋大学 農学国際教育協力研究センター ニュース

平成29年6月1日発行 通巻31号(年2回発行)

発行/名古屋大学 農学国際教育協力研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL 052-789-4225(受付) FAX 052-789-4222
<http://iccae.agr.nagoya-u.ac.jp/index.html>
e-mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp

ケニア国ナイロビにおいて SATREPS国際シンポジウム を開催

農学国際教育協力研究センター(ICCAE)は、ケニア農畜産業研究機構(KALRO)との国際共同研究として、地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)による「テーラーメイド育種と栽培技術開発のための稲作研究プロジェクト」を実施しています。本プロジェクトの取り組みについて広く発信し、研究成果の周辺国への展開に必要な国際的なネットワークの構築について協議することを目的として、2016年12月6日、ケニアの首都ナイロビにあるケニア農畜産業研究機構本部会議場において、KALRO、科学技術振興機構(JST)、国際協力機構(JICA)、アフリカ稲作開発のための共同体(CARD)との共催によるSATREPS国際シンポジウム「Tailor-made rice breeding and cultivation technology development for sub-Saharan Africa —Progress and future prospects of the SATREPS project in Kenya—」を開催しました。シンポジウムには、日本とケニアを含む14カ国から、研究者、技術者および国際協力関係者を含む合計105名が参加し、基調講演、口頭発表(12件)、ポスター発表(19件)およびパネルディスカッションが行われました。

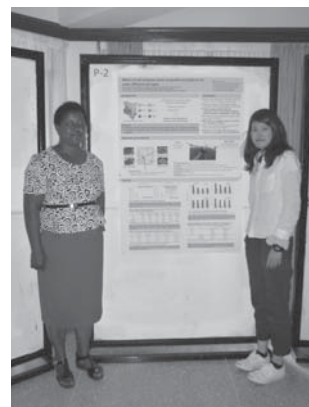
シンポジウムの冒頭、国際稲研究所(IRRI)のアブデル・イスマイル主席研究員による基調講演が行われ、IRRIがアフリカの稲作において問題となっている様々な生物的・非生物的ストレスを克服するために行っている様々な取り組みが紹介され、品種改良の重要性が指摘されました。続いて、国際共同研究プロジェクトに参画している日本とケニアの研究者7名により、本プロジェクトがこれまでに進めてきたアフリカ向けイネ品種の開発に必要なスクリーニングシステムと交配設備の整備、様々な環境ストレス耐性や生産性を向上

させる遺伝子/QTLを導入したアフリカ向け有望系統の作出、品種の能力を引き出す栽培方法の開発、共同研究を通じた人材育成などについて報告が行われました。また、國分牧衛JST研究主幹は、アジア、アフリカおよび南米で行われている稲作関連のSATREPSプロジェクトの概要とこれまでの成果について報告し、アフリカ稲センターの二口浩一プログラムリーダーは同センターがアフリカの国々との連携により実施している品種改良と栽培技術開発に関する取り組みを紹介しました。さらに、タンザニア国立チョリマ農業科学研究所のソフィア・カシエンゲ主席研究員は、タンザニアにおけるイネ研究と品種開発の現状に関する報告を行いました。JICAのアフリカにおける稲作技術協力プロジェクトの活動内容と成果については、ウガンダの国立農業研究機構作物資源研究所(ナムロンゲ農業試験場)で実施されている「コメ振興プロジェクト(PriDeプロジェクト)」の事例をジミー・ラモ主席研究員が報告し、ケニアの「稲作を中心とした市場志向農業振興プロジェクト(RiceMAPP)」については田澤裕之JICAチーフアドバイザーが説明を行いました。

パネルディスカッションにおいては、サブサハラアフリカにおける地域共通の重要課題であるアフリカ向けイネ品種と品種の能力を引き出す栽培方法の開発・普及に向けた国際的な協力体制の構築について活発な意見交換が行われました。その結果、本プロジェクトで整備したイネ品種の特性評価とイネの交配を大量に行うための施設・設備を活用し、国際農業研究機関との連携による国際協働ネットワークを構築することにより、KALROMエア支所をアフリカにおけるイネ育種および栽培技術開発の拠点として機能させることが提案されました。

シンポジウムの翌日、12月7日には、ムエア灌漑地区およびKALROMエア支所へのフィールドトリップが行われ、参加者は、ムエアに広がる広大な水田とプロジェクトの研究活動実施状況を視察しました。

平成28年8月にケニアにおいて開催された第6回アフリカ開発会議(TICAD VI)における合意を踏まえ、日本はアフリカ稲作支援を継続することが期待されています。今後、アフリカのイネ育種および栽培技術開発のための国際協働ネットワークを具現化するための活動を開始する予定です。(横原大悟)



ポスターセッションの様子



14カ国から集まったシンポジウム参加者一同

平成28年度JICA招へい事業「イネ育種高度化」(AGRI-Net)の実施

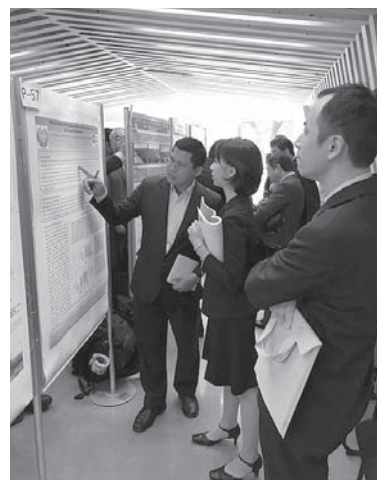
「食料安全保障のための農学ネットワーク協力(通称AGRI-Net)」の一環として、招へい事業「イネ育種高度化」を2017年3月6日～4月17日に行いました。今回は、AGRI-Netの試行と位置付け、ベトナム、ミャンマー、ケニアから計5名の研修員を受け入れ、九州大学、名古屋大学、ベトナム国家農業大学の連携により実施しました。まず、日本で一ヶ月、イネのゲノム科学と育種に関する講義を受講、DNAマーカーの取り扱い、遺伝子組み換え植物の作成やQTL解析の実習を受けました。続いてベトナムへ移動し、現地の国家農業大学及びソクチャン省イネ育種場において二週間、大量交配技術の実習、DNAマーカーと形質の連鎖解析の手法を学びました。ベトナムでは、日本との共同研究事業実施場所として整備された施設や圃場において実験実習を行うというプログラムを企画できたことにより、春の初めの時期に本事業を行うことができました。今回の試行実施にご協力いただきました日越の関係者全ての皆さまに御礼申し上げます。(江原 宏)



修了証書を授与された研修員と受入れ教職員

カンボジアサテライトキャンパスからのスクーリング生の受け入れ

国家中枢人材養成プログラムにおいてカンボジアサテライトキャンパスで学ぶ生命農学研究科博士課程後期課程1年のコン・キアさん(カンボジア農業省農業総局)が2017年3月26日～4月7日のスクーリングのために来日し、当センターに滞在しました。期間中、3月29日～30日に東京大学農学部弥生キャンパスで開催された第243回日本作物学会講演会において、Effect of Different NPK Rates on Rice Yield in Prateah Lang Soil Type in Cambodia(カンボジアのPrateah Lang土壌タイプにおけるNPK施用量の違いがイネ生産に及ぼす影響)と題した研究発表を行いました。また、4月5日には企業訪問プログラムに参加するなど充実したスクーリングとなりました。(江原 宏)



学会で研究発表を行うコン氏

ハサヌディン大学工学部研究・連携基盤強化プロジェクト(C-BEST)への支援

インドネシアではジャワ・バリへ人口・経済活動が集中し、スラウェシなど東部地域(EPI)との経済格差が依然大きい状況です。EPIは農林水産資源が豊富ですが、技術、情報、インフラ、人材の不足が開発阻害要因となっています。そこで、地場産業の創出・発展のための体制整備や人材育成に向け、JICA有償技術支援が2015年より実施されており、産学連携技術センターが設置され、研究と産学地連携の強化を目的とした協力が行なわれています。この度は、2017年5月18日～23日にプロジェクト運営指導に係る調査団員として南スラウェシ州に赴き、サゴヤシ資源の利活用による地場産業の振興に係る研究アドバイザーの業務に当たりました。(江原 宏)

離任挨拶

高橋（野坂）実鈴 特任助教

農国センターの先生方、研究員、学生、事務補佐員、技術補佐員の皆様には3年間大変お世話になり、誠にありがとうございました。農国センターに在籍していたことで、農学に関連した様々な研究分野にふれることができ、以前よりも視野が広がりました。この経験を生かして、今後も研究活動に励んでまいります。

皆様のご健勝と農国センターの益々のご発展をお祈り申し上げます。

“Integrate Counterparts through Collaboration on Agricultural Research & Education!”



略歴 2006年名古屋大学農学部卒業、2008年同大学大学院生命農学研究科博士前期課程修了、2012年同研究科博士後期課程満期退学、2013年博士（農学）（名古屋大学）取得。2014年名古屋大学大学院生命農学研究科特任助教を経て、2017年3月より国立遺伝学研究所助教

鮫島啓彰 研究機関研究員

私は2015年4月から2年間、研究機関研究員として農国センターに勤務いたしました。農国センターの様々な分野の先生方・研究員の皆様・学生さん達からは日々刺激を、職員の皆様からは多大なサポートをいただきましたことを心よりお礼いたします。勤務中は、地球規模課題対応国際科学技術協力（SATREPS）「テーラーメイド育種と栽培技術開発のための稲作研究プロジェクト」において、ケニア国ムエアのケニア農畜産業研究機構に長期滞在しながら現地環境での様々な圃場試験に携わる機会をいただき、アフリカの稲作についての理解を深めることができました。この貴重な経験を生かして、今後も研究を進めていきたいと考えております。



略歴 1973年生まれ。1997年北海道大学農学部卒業、2004年同大学博士後期課程単位取得退学、同年6月博士（農学）取得。国際農林水産業研究センター特別派遣研究員、神戸大学学術推進研究員、名古屋大学研究機関研究員などを経て、2017年4月より神戸大学学術研究員。

永井直子 研究員

2015年4月から2017年3月までの2年間、研究員として所属させていただき、また同期間はカンボジアで実施中のJICA草の根技術協力事業プロジェクト「カンボジアにおける農産物・加工品安全性向上プロジェクト」の現地調整員としてカンボジアに赴任いたしました。主な活動内容としては、現地カウンターパートのカンボジア王立農業大学の卒業生であるスタッフと共に、現地農家さんの酒造や野菜栽培に関する安全性や生産性が向上するよう研修活動を行いました。

このプロジェクトでの経験を活かし、今後も国際農業開発の分野において、日本の知見が途上国のニーズに合致し課題解決に繋がっていきけるよう努めていきたいと思っております。



略歴 2003年東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科卒業。2005年United Nations Centre for Alleviation of Poverty through Sustainable Agricultureインターンシップ終了。2005-2012年インドネシアにて日系民間企業勤務。2014年University of East Anglia MA Agriculture and Rural Development修了。2015-2017年上述プロジェクトに従事。2017年4月より開発コンサルタント会社に所属。

着任挨拶

久保亮介 研究員



2017年4月より農国センターの研究員として着任致しました。前年度までは、サハラ以南アフリカ（タンザニアおよびカメルーン）における酒造技術およびその醸造メカニズムの解明をテーマとして、研究に取り組んでいました。4月10日よりJICA草の根技術協力事業「カンボジアにおける農産物・加工品の安全性向上プロジェクト」の現地調整員としてカンボジアに滞在しています。本事業において私は、日本人専門家とカンボジア人現地スタッフの連携を図りながら、カンボジアにおける米蒸留酒や野菜などの安全性・品質向上に取り組んでいます。新しい土地での生活や初めて経験する業務に戸惑うこともあるものの、新しい経験を楽しみながら日々勉強する毎日を送っています。一生懸命任務に取り組みますので、これからどうぞよろしくお願い致します。

略歴 1986年生まれ。2009年北里大学獣医学部卒業。2011年京都大学大学院地球環境学舎修士課程修了。2015年同大学院博士課程単位終了満期退学。2015年5月博士（地球環境学）取得。2014年日本学術振興会（学振）特別研究員DC2（～2015）。2015年学振PDに資格変更（～2016）。2015年タンザニア・ソコイネ農業大学訪問研究員（～2016）。2016年京都大学大学院地球環境学舎研究員（～2017）。

学術雑誌「農学国際協力」Vol.15のご案内 ～ 一編の論文が、人の活動を促すことがある ～

この度、最新号Vol.15を公開いたしましたのでご案内いたします（URL：<https://iccae.agr.nagoya-u.ac.jp/jpn/journal/backnumber.html>）。本号より「ケースレポート」を、農学国際協力の現場や農学教育の現場で取り組まれている課題や成果（途中成果も含む）の発表を目的とした「ワーキングペーパー」と、最新のデータや情報を広く発信することを目的とした「フィールドレポート」の2種類に分けることとしました。これにより、国際協力の専門家や研究者だけでなく、ボランティアやNPO関係者など、より多くの方々からの情報やデータが、この雑誌を媒体として広く共有され、また蓄積されることを願っています。

本号では、JSTとJICAがともにサポートする「地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）の現状と期待」について、現JICA国際協力専門員の浅沼先生にご寄稿頂きました。また、名大アジアサテライトキャンパス学院長の磯田先生には、「大学の機能分化と新たな国際協力の在り方」について総説として纏めて頂いております。加えて、フィリピンの貧困漁村における漁業資源に関する原著論文や、上述の「ワーキングペーパー」、「フィールドレポート」、および「国際人材」に関する記事を掲載しております。

また、本号の巻頭言はJISNAS委員長の緒方先生にご執筆頂きました。「一編の論文が、人の活動を促すことがある。」との緒方先生の言葉を常に胸に抱き、今後も皆様の国際協力活動のお役に立てる記事の掲載を目指す所存です。皆様からのご投稿を心よりお待ちしております。（犬飼義明）

オープンセミナー（2016年12月～2017年5月）

回数	日時	テーマ	講師	所属
2016年度 第5回	2016年 12月13日	インドネシアの低生産地域における 農業生産性の改善に向けた取り組み	ルジト・A・スウィグニョ	インドネシア・スリウィジャヤ大学農学部 教授/ICCAE 客員教授
第6回	2017年 3月9日	持続的農業のためのイネ育種におけるアフリカ 野生イネ <i>Oryza longistaminata</i> の持つ可能性	エミリー・ギチュヒ	岡山大学大学院環境生命科学研究科 博士課程後期課程
第7回	2017年 3月13日	海外農業経営調査の実際	内山 智裕	東京農業大学国際食料情報学部教授/ ICCAE 客員准教授